

# 『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

高橋敬一

## 一 はじめに

「テアリ」は、いわゆる完了の助動詞「タリ」が進行態・已然態の意味を表わさなくなったために、それにかわって復活することとなった。(近代語「テアリ」愛媛国文と教育一九一九八七・一二)

この柳田征司氏の指摘は、中世期の「テアリ」のアスペクト研究において、その出発点ともなるものである。中世期およびそれ以後の「テアリ」については、坪井美樹一九七六、柳田征司一九八七、山下和弘一九八九などの御研究により、「主語の性情(有情・非情)・(上接する)動詞の自他」・「アスペクト」の性格等が明らかになっている。ただし、それらは「タリ」、「テキル」との相対的な関係を論じたものが多く、「テアリ」の本質に触れていないようにも思われる。

本論は、一三世紀初頭に成立した説話集『宇治拾遺物語』を資料として、有情物を主語とする「テアリ」の用法(有情物主語…四五例、非情物主語…一六例)を、「テキル」(「テキタリ」「テキ給へり」との関係を検討しながら)と関係を検討し、そのアスペクト的性格を構文論的な視点から明らかにしようとするものである。テキストは、「無刊記古活字本」(岩波『古典文学大系』二七・小学館『古典文学全集』二八)を用い、適宜、「陽明文庫本」(岩波『新古典文

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

学大系』四二) および「宮内庁書陵部蔵写本二冊本」(『笠間影印叢刊』四六)と校合させることにする。

## 二 「テアリ」と「テキル」の用例

『宇治拾遺物語』における「テアリ」と「テキル」の用例を、古代日本語のアスペクトとテンスとは不可分の関係にあることが知られているので、下接する「時の助動詞」(「キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ」)によって、それぞれを分類してみると次のようになる。尚、( )内の数字は会話文中の用例数を示す。

「テアリ」

- 動詞連用形＋テ (ゾ／ナム) アリ＋ケリ 四五例 (八例)
- 動詞連用形＋テアリ 二二例
- 動詞連用形＋テアリ 二四例 (八例)

「テキル」

- 動詞連用形＋テキ＋タリ 五一例
- 動詞連用形＋テキ＋タリ 四一例
- 動詞連用形＋テキ＋タリ＋ケリ 五例
- 動詞連用形＋テキル 二例
- 動詞連用形＋テキ＋ヌ 二例
- 動詞連用形＋テキ (給へ)＋リ 一例

両形式には、下接する助動詞に相違がみられる。「テアリ」には「タリ」が承接しないのに対して、「テキル」の場合は多く「タリ」を承接して機能している。ただし、これをもって、直に「テアリ」の復活を論じることができない。

その他、両形式の相違としては、「テアリ」には、会話文中の用例（八例）があるのに対して、「テキル」はすべて地の文で用いられている。また、「テアリ」には「テ」と「アリ」の間に係助詞「ゾ」（七例）・「ナム」（一例）が挿入されることがあるが、「テキル」にはそのような例はない。

次に、日本語のアスペクトの決定は、動詞の性質と不可分の関係にあることが知られているので、「テアリ」と「テキル」に上接する動詞を掲げてみる。尚、「テアリ」の用例中に○印を付した動詞は、「テキル」のそれと重複するものであることを示す。

#### 「テアリ」（三八語）

相具す 相居る ○集まる 浮ぶ 得（う） 打為（す） ○行なふ（二例） 抑（おさ）ふ 思（おぼ）す ○思ふ（三例） ○掛く ○隠る 通ふ 着替ふ 着なす 下（くだ）る 食（く）ふ（二例） 事叶ふ 差し上がる 従ふ（二例） 頼む 保つ 付く ○作る 止（とど）まる 捕ふ 泣き合ふ 永らふ 成る（二例） ○念じ入る 挟まる 微笑（ほほゑ）む 任（まか）す 見る 召し上ぐ 読む 蟠（わだか）まる 居広ぐ

#### 「テキル」（四五語）

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

呆る 集まる 言ふ 抱く 打懸く 打被(かづ)く 打取る 打惚(ほう)く 拝み入る 起き立つ 行  
なふ 押し取る 思ふ(三例) 搔い屈(かが)まる 抱ふ 掛く 隠る 畏まる 帰る 差し当つ 差  
し覗く 為果(しおほ)す 装束す す(五例) 揃ふ 反らす 立つ 作る 唱ふ 並ぶ 退(の)く  
登る 念じ入る 掃く 吐く 引き廻す(二例) 跪く 開く 申す 参る 持てなす 物語す 物忌す  
向ふ 笑ふ

両形式には、共通する動詞(「集まる・得・行なふ・思ふ・掛く・隠る・作る・念じ入る」)に承接した例があり、しかも、現代語においては、一般には他動詞に承接することの多い「テアリ」に、多くのいわゆる自動詞(「集まる・浮ぶ・隠る・通ふ・下る・差し上がる・従ふ・止まる・泣き合ふ・成る・挟まる・微笑む・蟠まる」等)が付いた例が存する等々、上接動詞に顕著な相違は認めがたい。

### 三 状態性アスペクトの「テアリ」について

『宇治拾遺物語』において、同一動詞に付いた「テアリ」と「テキル」の用例は、次の通りである。尚、各用例に付した番号は、(a)(b)・・は「テアリ」形式、①②・・は「テキル」形式の用例であることを示す。

「集まる」

①博打ども集まりてありければ、…… (第一二三話)

①あつまりてゐて、・・・「・・・」といひあへり（第一八話）

「行なふ」

- ①a この姉の尼君も、・・・そこに行なひてぞありける（第一〇一話）
- ①b 太政大臣になりて、世の政を行てなん有ける（第一八六話）
- ① 聖失せ給ければ、又そこにぞおこないてゐたりけるとなん（第七話）

「思ふ」

- ①a ふたりの親、これいかにして世にあらせんずると思て有ける所に（第一一三話）
- ①b このたびは、・・・よさりいかにもなど、思てあるほどに（第四七話）
- ①c 女と思て、いみじき質を取たると思てあれども（第一一六話）
- ① 浅ましと思てゐたる程に、・・・人あまたぐしていできたり（第一七話）
- ② 大宮司、われはと思てゐたるを、・・・国司とがめて（第四六話）
- ③ はづかしと思てゐたるに、・・・幕引きまはしてゐぬ（第一〇八話）

「掛く」

- ①a まもりなどのやうに、くびにかけてぞありける（第一八〇話）
- ① かた膝つきて、太刀のつかに手をかけてゐたり（第一三二話）

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

「隠る」

- ① a 「……しばしかくれてあらんと思なり」といふに（第一七〇話）
- ① かくれてゐたりける程に、……のしりきはぐ（第一五五話）

「作る」

- ① a みじろぐべきやうもなく、うんじ顔つくりであり（第一七六話）
- ① 岩海のはるかにさし入たるむかひに、家をつくりてゐたり（第二二八話）

「念じ入る」

- ① a こはいかにしつる事ぞと思て、念じいりてある程に（第八七話）
- ① 「……恥見せ給な」と念じ入てゐたる程に（第一七二話）

この期の「テキタリ」にアスペクト的性格を認めようとする立場に立つて、これらの「テアリ」の用例を前後の文脈等から分析してみると、「テアリ」にも、「結果相」（動作そのものは一度終了し、その状態が継続中であるもの）と定義して用いる。因みに、「進行相」は「動作そのものが継続中であるもの」と定義して用いる（というアスペクト的性格が認められることになる。これは、現代語における「てある」の表わす状態性アスペクトを「対象の結果の状態」「動作がおわったこと」等とすることと連続する。

それでは、両形式の相違は、どこにあるのであろうか。現代語の「てある」について、「（結果の継続を明示する

「ている」に替えて、「である」が用いられる場合について）結果の状態に対して何らかの強調が加えられ、目的の含意が生ずる」（町田健一九八九）とする見解がある。この視点に立つて、これらの用例を検討してみると、「テアリ」文には、次のような構文的な特徴があることがわかる。

(1) 「集まる」①、「思ふ」②のような条件節の中で用いられている例（「目的性」）…五例

(a) その木の枝をとらへてありければ（第八七話）

(b) 車をおさへてありければ（第九九話）

(c) 女、すこしほほゑみてありければ（第一〇六話）

(2) 「行なふ」①②、「掛く」③のように「係り結び」文の中で用いられている例（「強調」）…八例

(a) 三とほり、四とほりに居広げてぞありける（第一四話）

(b) いとも頼もしき法師になりてぞありける（第八八話）

(c) 牛はひとり、橋の上にとどまりてぞありける（第一一八話）

(d) 異水干着かへてぞありける（第一八〇話）

(e) 山寺などに通ひてぞありける（第一八五話）

(3) 「隠る」①のように「会話文」の中で用いられている例（「目的性」・「強調」）…八例

(a) 「…追ふべき事もあらねば、さて見てあるに、…」と（第二三話）

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について

- (b) 「：又ひとへにたのみてあらむずるぞ。：」とて（第七七話）
- (c) 「：法師になりて、昼夜はなれずつきてあれ」と（第七八話）
- (d) 「：他念なく経をたもち奉りてあるしるしやらん、：」と（第一〇四話）
- (e) 「：それがいはんにしたがいてあるべきなり」と（第一〇八話）
- (f) 「：ともかくも、いふにしたがいてあり。：」と（第一〇八話）
- (g) 「：いつも長らへてあらんずるうへに、：」といへば（第一六五話）

このように、『宇治拾遺物語』の「テアリ」は、「結果の継続・状態」という意味を、優先的な意味として表示するための形式であると考えることができる。この期の「テアル」にも、同じ機能（結果の継続・状態）が備わっていると考えられるので、両形式の相違は、「テアリ」に何らかの「強調」が加えられて表示されているものと考えられるのである。そのために、「テアリ」には「結果の状態」に対して「目的性」といった付随的な意味が生じるといふことであろう。

次に、「（いわゆる）自動詞＋テアリ」について、検討してみる。用例は次の通りである。ただし、前に示した「集まる」「一例」「隠る」「一例」「通ふ」「一例」「従ふ」「一例」「止まる」「一例」「成る」「一例」は除く。

「相居る」

(a) 家の人々も、さてあひ居てあらん、物むつかしくおぼえて（第四七話）

「浮ぶ」

(a) この童そひて、あへて海にしづむことなし。浮びてあり (第一二三話)

「下る」

(a) 今は昔、貫之が土佐守になりて、くだりてありける程に (第一四九話)

「差し上がる」

(a) 大やかなるを腰にはさみたれば、むねにさしあがりてあり (第五三話)

「従ふ」

(a) 夢にみえさせ給しをたのみて、ともかくも、いふにしたがいてあり (第一〇八話)

「泣き合ふ」

(a) 妻子泣きあひてありける二日といふに、夢のさめたるこちして (第一〇二話)

「成る」

(a) 俄にかくなりてあるなりと、かたり侍りけり (第一二三話)

「挟まる」

(a) おしふせて、ただおかしに犯さんとて、股にはさまりてある折 (第一七四話)

「微笑む」

(a) 女、すこしほほゑみてありければ、いよいよ心得ず覺て (第一〇六話)

「蟠まる」

(a) くちなはは、板敷のしもに、柱のもとにわだかまりてあり (第五七話)

これらの文の「表現者」の関心は、それぞれの動詞が表わす「動作・作用の今ある状態」の方であろうか、それとも、それに対する「主体（動作主）の存在」の方であろうかと考えてみると、おそらく後者の方が強いのではないだろうか。このことを実証することは難しいのであるが、筆者は、「自動詞」に「テアリ」が付いた語法を、「テアリ」によって一度状態化した「動詞句」を形成することによって、それに対する「主体（動作主）の存在」を意識させる（「強調」）ための語法であろうと考えている。このような用法は、「テキル」にはない。

#### 四 まとめ

『宇治拾遺物語』における「テアリ」のアスペクト的性格を構文論的視点から考察した結果は、大略、次のようなことである。

状態性アスペクトを表示する「テアリ」が用いられる文の条件は、次の通りである。

- ① 条件節を形成する句中
- ② 「係り結び」文の結び
- ③ 会話文中

「テアリ」と「テキル」（「結果の継続・状態」を表示する場合）の用法の相違は、次の通りである。

- ① 「テアリ」には、「結果の継続・状態」に対して「強調」が加えられる用法がある。
- ② 「テアリ」には、「結果の状態」に対して「目的性」という含意を持つ用法がある。
- ③ 「テアリ」には、「主体（動作主）の存在」が強く意識される用法がある。

次のような論文を参考にした。

- ・野村雅昭「近代語における既然態の表現について」(『佐伯博士古希記念国語学論集』表現社 一九六九)
- ・坪井美樹「近世のテイルとテアル」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社 一九七六)
- ・金水 敏「人を主語とする存在表現―天草版平家物語を中心に―」(『国語と国文学』一九八二・一二)
- 同 「上代・中古のキルとヨリ―状態化形式の推移―」(『国語学』一三四 一九八三・九)
- 同 「「いる」「おる」「ある」―存在表現の歴史と方言―」(『ユリイカ』一九八四・一一)
- ・柳田征司「近代語「テアル」」(『愛媛国文と教育』一九八七・一二)
- ・山下和弘「「テイル」と「テアル」」(『語文研究』六五 一九八八・六)
- 同 「中世以後のテイルとテアル」(『国語国文』六五・七 一九九六・七)
- ・町田 健「日本語の時制とアスペクト」(『アルク』一九八九)

『宇治拾遺物語』における「テアリ」について